

仕事がいやになったあなたへ

和田 康夫

赤穂市民病院皮膚科部長

まず申し上げます。私は仕事がいやで引きこもっていた時期があり、ワークライフバランスというテーマについて偉そうに語る資格はありません。すでに生きがいを見つけている先生方は、存分に自分の人生を謳歌してくださいませ。これは引きこもりだった私から、生きる意味が見出せない方へのメッセージです。

仕事がいやになったあなたへ。もとより医学部志望ではなかったものの、親のすすめのまま進路を決めた。入学当初から違和感を覚えた。志もなく自分の本来の道ではないという疎外感があった。親しい友達もつくらず6年間の学生生活が過ぎた。選んだ皮膚科も消去法で決めた。卒後1年目は大学病院での雑務に追われた。卒後2年目が国立京都病院(当時)での研修。京都随一の皮膚科医である荻野篤彦先生には、これ以上ないくらいに可愛がってもらった。その1年が私にとって唯一受けた研修であり、いまま私の生涯の財産となっている。だが心の奥深くには「臨床は自分の人生ではない」という空虚感がまわりつくように根ざしていた。私は臨床を離れ大学院へ逃げた。ところが大学院は超一流の研究施設であり、研究にも挫折し1年で不登校になった。皮膚科の同僚ともすべて連絡を絶ち、家でゲームをしたりぶらぶら過ごしていた。大学院在院期間が過ぎると学生生活も自動的に終わりを迎える。生活のためやむなく、福井県の公立小浜病院に一人医長として赴任した。週に一度、はるばる京都大学(以下、京大)から診療の応援に来てくれる先生がいた。高橋健造先生(現・琉球大学名誉教授)である。健造先生の名前は聞いたことがあったが、お会いするのは初めてであった。とてもよくしていただいた。明るく軽く、おぼつかなく倒れてしまいそうな私の診療の補助輪のようにいつも伴走をしてくださった。ヘマをしても怒りもせず、にこやかで快活に接してくれた。不出来な私でも臨床をしていいんだといてくれているかのようなようだった。健造先生の功績は大きい。小浜病院開設以来、初めてのAIDS患者の発見があった。重度の乾癬様患者が入院した際に、梅毒とHIVの混合感染であることを看破された。別の例で不明熱と発疹で皮膚科に入院した患者が、皮膚生



検の結果、白血病の皮膚浸潤であることが判明した。福井大学血液内科に相談するも受け入れ困難と断られた。途方に暮れ京大の健造先生に泣きついた。「いまから京大皮膚科に送って。京大の内科もすぐには対応してくれないだろうし、うちの皮膚科でいったん入院させて、あとは内部で処理するから。」と快諾いただき、救急車の手配に手間取り京大到着が夜遅くになったが、健造先生たちは待っていてくれた。後年、そのお礼を述べたがまったく覚えておられなかった。取るに足らないできごとだったのだろう。ギネス級の巨大マダニの2症例を続けてみせてくれ、疥癬などの感染症皮膚疾患治療へ導いてくれたのも健造先生である。自分の進むべき道を示してくださった。

心の空虚感はいまもある。自分の居場所ではないという感覚はいまもある。それでもいい。いまある場所で何かやりたいことを少しみつけては取り組んでいる。心の防衛術といえるメンタルヘルスマネジメントを勉強したことがある。深い闇にいるときには役に立たなかった。だが気づいたことがある。闇の中にいると新しい心の扉が開いて、見えなかったわずかな灯火がみえるようになる。先がみえなくなったとき、次にどんな世界がみえてくるのか、少し楽しみにできるようになった。

皮膚科に進んだことに後悔はない。一時期、誰とも関わりを絶っていたが、40歳ごろから皮膚科界限に、ぼつりぼつりとつながりができてくるようになった。いまはいろんな先生方と細い糸でつながっているのを感じる。クモのように細い糸が皮膚科医としての命の支えとなる。細い糸で命をつないでくださった方々へ感謝申し上げます。中でも編集委員の馬場直子先生、リレーエッセイのご依頼を下さいました佐藤俊次先生に深謝申し上げます。